



BUKKYO UNIVERSITY

URL <http://www.bukkyo-u.ac.jp/>

教授法

vol.10

編集 / 教授法開発室

発行 / 佛教大学

発行日 / 2003年11月25日

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

TEL.075-491-2141 FAX.075-493-9019

開発室だより

教授法開発室の方針と将来展望

教授法開発室 室長 原 清 治

大学教育の質が問われ始めている。そこで、これまでの一定の評価をするとともに、従前からの3部門を基本にして、本年度の方針とあわせて教授法開発室の今後の展望について以下に示してみたい。

「学習システム開発部門」については、I-supportシステムを中心に、学内外からも一定の評価が得られるようになってきた。今号においても、その活用報告を掲載しているので御一読願いたい。I-supportシステムは、導入当初に比べ、検討・改善を重ね、格段の進歩を遂げているが、報告にもあるようにまだ長所・短所の両面をあわせ持つ。しかし、その短所を迅速かつ確実に改善することで、本学がこれまで実践してきた自律的学習の支援という「特色ある教育」をより具体化させることにつながれると思っている。またこのシステムは、将来的にも講義に大きな効果を発揮すると考える。今後もI-supportの多方面への活用を含め、より一層の授業改善について検討を重ねていきたい。

「情報調査部門」については、学生の学習実態と意識を把握するため、従前より基礎学力調査を実施してきた。基礎学力調査は新入生および3回生の春学期オリエンテーション期間に実施し、その実施目的については学内教職員にも浸透してきている。今後は基礎学力調査で得られたデータと、関連データとの

リンクを含め、その有効活用についての検討が重要となる。また、次年度以降は、新カリキュラムの導入にあわせて、語学などのプレースメントテストも実施していく予定である。

「評価システム部門」については、主として、授業評価のあり方とその方法を中心に検討してきた。授業評価アンケートは第三者評価の求められる時代において、FD活動では避けて通れない部分である。今年度は、専任・非常勤を含めて全員に授業評価アンケートの実施協力を強く依頼するとともに、集計の機械化による実施教員へのフィードバック時間の短縮を可能にした。その結果、実施実績は大幅にアップした。今後も授業改善について、さまざまな方法を検討していきたい。

また、今年度より新たに懸案事項であった「高大連携」あるいは「入学前教育」についても教授法開発室が積極的に関わり、本学の教授法開発と特色ある教育実現への取組みに有効活用できるように検討・実施している。高大連携については、大学コンソーシアム京都とも連携を持ちながら進めている。また、入学前教育についても今後の入学者の学力低下問題を含めて、具体的な方策を検討していきたい。

最後に、今後も教授法開発という見えにくい領域のあり方と方法を検討し実施していくことについて、学内外のご理解と協力をお願いしたい。

「社会福祉領域でのI-supportの試み」

昨年度秋学期にI-supportを試みようと思立った理由は二点ある。ひとつは、私の担当する「社会福祉援助技術論4」は、社会福祉実践の一方法であり地域援助技術(コミュニティワーク)とも呼ばれ、その科目特性から何かやれるかもしれないの思いからである。講義では、地域の把握、問題の焦点化、環境的側面への具体的関わりや働きかけについてどう伝えていくか、それは時にどのような媒体を用いるかが大きな課題となってくる。対象は、社会福祉とは何かを学び、ケースワーク・グループワークといった援助技術のレポートの学習をひとまず終え、高齢者・児童・障害者などの分野論を学びつつある2回生第4セメスターの学生約120名である。また、学生がコミュニティや社会福祉の実践に対し関心がもてるかどうかこの科目のねらいのひとつであり、「他者との関係性をつくる過程や場面」にITはどれほど有効性を持ち得るのか、学生自身にI-supportを通して考えてもらいたいということがふたつめの理由であった。

実際には、学期開始から数週間後、導入としてI-supportシステムの説明、携帯電話での出席やアンケート回答、教材創庫、小テストなどを体験する時間をつくった。学生から寄せられるシステムに関する質問やトラブル(主に携帯電話接続の不具合、メール配信のトラブルなど)は教授法開発室の専門員の方が授業時間以外でも対応してくださった。私が一番多用したのが「掲示板」機能であり、受講生全体で共有する掲示板と班ごとの掲示板(班員と教員のみが使用可能)の二種類を用意し、個人で全体(もしくは教員)に向けて発言する場合、班の中で意見交換などに使用する場合など、誰に向かうコミュニケーションなのか考えながら使うことを学生に向けて提案してきた。そして学期末には、「地域の中での課題を選び解決のための一事業をプランニングする」という班での課題を提示し、「議論→各地の事例を収集→検討→レポート作成」の過程でまとめたものをI-supportの「レポート」に送信(画像可)することを求めた。

ふりかえると、前半は学生と教員との双方向性を、後半は小集団で課題にとりくむ上での掲示板を意識したI-support活用の三ヵ月間であった。講義全体の中でどう位置づけ取り入れるか、それがどのような意味をもたらすのか、常に試行錯誤だった。そのような中、学期途中に学内のI-supportを用いた公開授業

に参加し学生にインタビューをする機会に恵まれ、そこで学習の到達度と学生自身の気づきや戸惑いに連続して注目するという大きなヒントを得た。これをきっかけにその後幾度となく学習場面で思い出され、学生個人のあるいは集団としての変容過程とのつながりから考えていく必要性を引き続き感じている。

今後のI-support実践の可能性についてあくまでもわずかな期間での個人的印象の範囲でふれるならば、個別レベルでの学習成果にとどまらず、それらを基礎にしつつグループで学びを積み上げる相互的かつ段階的使用への期待ということをあげておきたい。そしてそれらを支えるものとして次の三点が考えられるが、その前提には、例えば障害があるなど何らかの個別の困難に対し大学がウェブアクセシビリティをどう工夫し保障していくかが問われているのと同時に、広くユーザビリティの確保へとつなげていくべき課題でもあるという認識からのスタートであることを強調しておきたい。その上で、①学生のIT技術を継続的にサポートするTAの存在、②IT以外に学生に求めるリテラシーと設定課題の明示、③これらを踏まえた総合的システムの構築、となるであろう。つまり集団学習の中で課題の読み解きに始まり、続く議論・検討の過程において、またそれぞれの役割遂行へと展開していく際に、こうした準備と配慮次第でさらに短期間ごとのメンテナンスやシステム修正により、I-support機能は学生間の自律学習の有効な場面を構成していくのではないかと。ならば、実践に対する評価スケールの開発と多角的な論議も当然のことながら待たれるところである。

実学としての性格をもつ社会福祉の学びにおいて、いくつかの課題はあるものの、多様な科目特性を踏まえこうしたI-supportの経験が積み重ねられていくことでITのもつ可能性と広がりを確かに実感させてくれるものとなる。

最後にI-support実践にあたり多くの協力をいただき、また今回このようなふりかえりの機会を与えていただいた教授法開発室および関係者の方々に心より感謝申し上げたい。

〈文責：健康福祉学科 緒方 由紀〉

エルサポート実践報告 実例編

2002年度秋学期から、私の担当する「応用社会学研究方法1」など2科目にI-support導入を試みた。いずれも応用社会学科1回生対象の必修科目であり、多人数の講義形式である。導入の当初の目的は、講義中数次にわたり提出させているレポートについて教員側の負担を軽減したい点にあった。そのため使用手段は「レポート」機能に限定し、講義に関する連絡手段として「ニュース」機能も併せて活用した。「レポート」提出を中心とする限り、学生からのアクセス・送信手段は携帯電話よりもパソコンが中心となる。

利用を限定したため、当初は比較的問題なく使用できるように思われたが、実際ふたを開けてみるとシステムの・技術的な問題点が続発し、管理運用に当たる(株)ネットマンにその都度ご尽力いただいた。幸い技術的課題の大半はその後改善されたので、詳細はここでは省略することにして、以下「レポート」提出にしばり、私の経験の中から教員側が配慮すべきポイントを提示しておくことにしよう。

まず、学生の使用パソコンの条件である。応用社会学科では2001年度新生から、パソコン未所有者に対し学科推奨のノートパソコンを購入させており、所有だけを見るとほぼ全員に近い。しかし1回生時には、殆ど使用していなかったり、インターネットやEメールの接続設定をしていない者も少なくない。その分サンサーラとの併用が必要となり、学内の情報機器操作能力が前提となる。もうひとつは、送信がうまくいかなかった者、提出期限に間に合わなかった者への対応である。特に受講生が多人数になるほど、対応も頻繁に生じる。これについては、個別持参の容認や、提出期限後の再提出レポートの出題など、様々な配慮の回路を用意しておかないと、I-support使用による学生側の不利益というリスクを抱えることになる。

一方この「レポート」機能では、提出されたレポートに対し、教員側から内容の修正や再提出をEメールで求めることができ、双方向での指導が可能である。しかし、システムに当初登録されている学生のアドレスは架空のものであり、学生が自ら日常使うアドレスを登録しておかないと、メールは届かない。登録変更を学生に呼びかけても、レポートのように提出物＝成績に直結しない限りなかなか変更しないのが実情である。これに対しては、講義上の「提出課題」としてI-support上への「相談メール」送信と教員からの「返信」確認を課し、教員からの返信の届かない学生に対し重ねて変更を促すという方法が有効であろう。Eメールの連絡網が完成することにより、レポートに限らず、受講生個別ごとの指示・指導も可能となる。

2003年度春学期には、「応用社会学基礎ゼミ」「応用社会学演習」といった少人数クラスの講義においても活用を試みた。1回生対象の「応用社会学基礎ゼミ」では、メールや添付ファイル送信に慣れてもらうという目的もあり、教員へのメール送信やアドレス変更、レポート送信を義務づけた。また、学生発表のレジュメ等を「教材創庫」に掲載させたが、効果的な活用の段階までは至らなかった。パソコン初学者である1回生向けに有効な活用方法の実践が次の課題である。

また、前年度のような多人数の講義では、受講生相互のコミュニケーションを構築できないため、「掲示板」の活用が困難であるが、ゼミ4回生に対し、「掲示板」を利用してゼミ合宿の日程や調査内容を学生側で立案するよう提案したところ、夏期休暇に入った現在、「掲示板」を使った活発な意見交換が学生相互で進行中である。これについて他の先生方の活用実践例があれば、是非参考にさせて頂きたいと考えている。

利用を通して感じた点を最後に記しておく。教員側の利便性への期待と学生側の利便性とは異なるということ、教育効果に対する過剰な期待に慎重であるべきこと、また手段や機会を持たない学生への配慮という点である。3つ目の点については、パソコンはともかく、携帯電話を利用できない学生に対応が必要だということにある。携帯電話全盛の今日でも、少数ながら非所有者、所有はしてもインターネットサービスを利用していない者、また料金が払えず使用不能状態にある者など、私の多人数講義の中で試用した限りでも一定数の接続不可能者がいた。携帯電話に関しては、講義プログラムに恒常的に組み込むことには、このような理由で私は懐疑的である。

いずれにせよ、I-supportの活用には教員の一定の工夫と努力、教材開発の試みなどが必要なことはいうまでもないであろう。

〈文責：応用社会学科 関谷 龍子〉

1. 大学で数学を教えることの難しさ

一般に、大学での教養科目における数学の立場は、すこぶる芳しくない。現実社会、自然環境、文化といった直接的に学生と関わり合いの強い内容が好まれる中、抽象レベルでの数字と文字の操作や式変形に終始した数学の世界は、異質な世界の異質な作業として学生の目には映っていることであろう。

そこでは、今日の科学技術社会の発展には数学の存在が不可欠であったことや、これからの高度通信情報社会を生きていく上においても基礎的な力であるといった説明は、説得力を持つものとならない。むしろ、彼らの周辺に存在する情報通信機器のインタフェイスは、限りなく数学を必要とせずとも操作可能な状態へと年々進化してきており、インタフェイスを改良する人間にはさらなる数学が必要であっても、機器を操作する人間には数学が必要ないといった、パラドクスが生じているのである。多くが後者の立場をとる学生を対象に、わずか13回の数学の講義内容を構築することの難しさがここにある。以下では、上記の問題点を少しでも打開し、学生が主体的に参加できるようになるための講義のあり方について、I-supportシステムの活用を踏まえ検討していく。

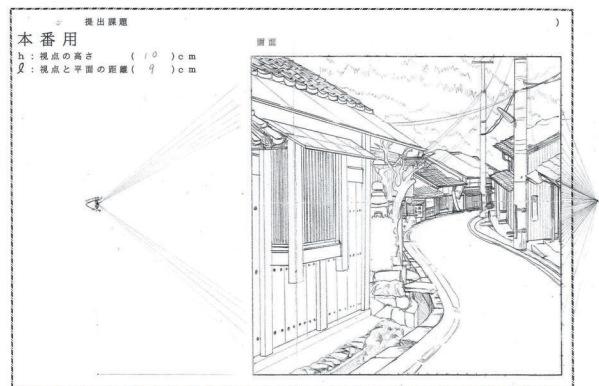
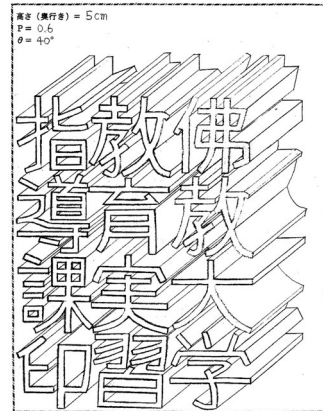
2. 自然科学系共通科目「自然の方程式」での取り組み — 講義内容と評価 —

数学の問題を順に解いていくというものでなく、文科系学生の興味・関心に応えるよう数学と文化、とりわけ絵画・造形との関係を踏まえたものとした。場面に応じて子どもの作品(絵画・造形)との関連も取り入れた。

評価は、出欠、講義後の感想カード、2つの課題の三つをもとに判定。各回の講義内容は以下の通りである。

- 第1回 ヨーロッパと日本の絵画を比較
- 第2回 中国古代の絵画
- 第3回 斜投影図法について
- 第4回 エジプト時代の絵画と影絵
- 第5回 ギリシャ・ローマ時代の絵画
- 第6回 中世ヨーロッパの絵画と逆遠近
- 第7回 中国唐代の絵画
- 第8回 ルネサンス時代の絵画
- 第9回 数学的遠近法について
- 第10回 日本の絵画
- 第11回 16世紀の日本の絵画
- 第12回 洛中洛外扇面について
- 第13回 浮世絵

課題は、斜投影法と数学的遠近法を用いた絵画制作とした。以下は学生の作品。



3. 講義におけるIT化の試み

(1) 講義における映像機器の利用

ビデオプロジェクター用いて、テーマとなる絵画を大きく示すとともに、細部を詳細に見ることができるよう、拡大が可能なように設定した。また、二つの画面を別々に用いて、一つは講義内容、もう一つはI-supportの画面等に活用したりもした。

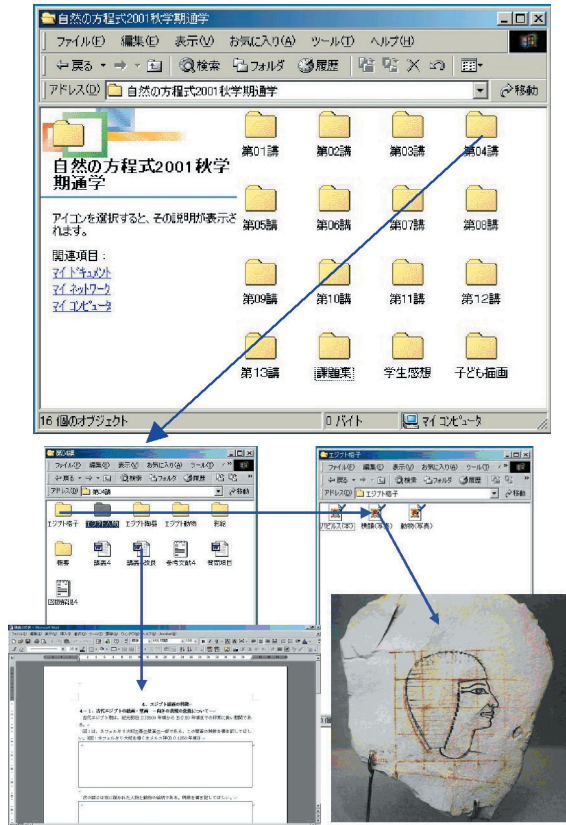


(2) コンテンツのオンライン

13回の内容をすべてオンライン化し、受講生は講義外の時間でもコンピュータ自習室で講義内容を全て閲覧・印刷するこ

エルサポート実践報告 実例編

とが可能となるようにした。また、講義内容に関する質問や感想についても学生側から送信可能なようにした。



その結果、学生からは次のような感想が得られた。

- ① 興味ある作品を時間に制限されずじっくりと詳細にみることができる。
- ② 講義内の解説で理解できなかった点を、再度、学習しなおすことができる。

操作	未読	記事ID	発言者	投稿日	削除	ツリー	タイトル
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003241		2002/10/29 17:03:36	<input type="checkbox"/>	●	0064なぜ...??
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003240		2002/10/29 16:53:56	<input type="checkbox"/>	●	0063図1について
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003239		2002/10/29 16:53:42	<input type="checkbox"/>	●	0062読後
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003237		2002/10/29 16:50:14	<input type="checkbox"/>	●	0061半円座の描画
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003236		2002/10/29 16:50:00	<input type="checkbox"/>	●	0060図2について...
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003235		2002/10/29 16:49:28	<input type="checkbox"/>	●	0059図1&図2を見て
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003234		2002/10/29 16:49:21	<input type="checkbox"/>	●	0058感想
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003233		2002/10/29 16:49:17	<input type="checkbox"/>	●	0057図について
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003232		2002/10/29 16:49:04	<input type="checkbox"/>	●	0056図1&図2(コウ)人差し指!
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003231		2002/10/29 16:48:49	<input type="checkbox"/>	●	0055図1について
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003230		2002/10/29 16:48:45	<input type="checkbox"/>	●	0054図1について
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003229		2002/10/29 16:48:40	<input type="checkbox"/>	●	0053図1
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003228		2002/10/29 16:48:14	<input type="checkbox"/>	●	0052?
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003227		2002/10/29 16:48:06	<input type="checkbox"/>	●	0051?
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	000003226		2002/10/29 16:48:03	<input type="checkbox"/>	●	0050手に持っているもの

【揭示板】 発言一覧	前の発言	次の発言	【発言一覧】	【新規発言】
記事ID	000003218			
タイトル	0044図1について			
発言者				
投稿日	2002/10/29 16:47:00			
本文	地面が水平なのは椅子が斜めなのはなぜですか?			

- ③ 様々な絵画を、自身の観点から、比較・検討することができる。
- ④ 講義を欠席した際に、後から自分で学習できる。

(3) 携帯電話を活用した講義内質問掲示板

講義内のある時点で、質問タイムを設定し、学生から携帯電話で質問した内容が、瞬時に集約され、掲示できるようにした。100名を越す講義において学生が手を挙げて質問をすることは、現実的にはかなり困難なことであるが、携帯電話を活用すれば、多くの学生の疑問が、瞬時に集約されることとなり、学生の理解に応じた講義の進度を設定することが可能となる。実際、授業で活用すると、多くの学生がこのシステムに対して好意的であった。

(4) 携帯電話を活用した講義内アンケート

講義内にアンケートを実施し、その結果が瞬時に集計・分析され、学生に掲示できるようにした。例えば、講義の開始時点と終了時点で同じ問いを行い、学生がどのように意識が変容したのかを掲示するなどの試みを行った。その結果、学生は、自分の考えが全体の中でのどのような傾向にあるのかを知ることや、隣の人たちがどのように考えているのかを知ることができるように、新鮮さを感じていた。

授業開始時点	授業終了時点																																																																																																
<table border="1"> <tr><th>質問</th><th>回答</th><th>割合</th></tr> <tr><td>図1の半円座に、どの部分が好きですか?</td><td>回答数</td><td>割合</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>9</td><td>100%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>40</td><td>61%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>16</td><td>23%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>0</td><td>0%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>2</td><td>3%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>4</td><td>6%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>32</td><td>70%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>6</td><td>12%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>0</td><td>0%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>3</td><td>4%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>40</td><td>73%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>2</td><td>3%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>0</td><td>0%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>16</td><td>24%</td></tr> </table>	質問	回答	割合	図1の半円座に、どの部分が好きですか?	回答数	割合	図1の半円座	9	100%	図1の半円座	40	61%	図1の半円座	16	23%	図1の半円座	0	0%	図1の半円座	2	3%	図1の半円座	4	6%	図1の半円座	32	70%	図1の半円座	6	12%	図1の半円座	0	0%	図1の半円座	3	4%	図1の半円座	40	73%	図1の半円座	2	3%	図1の半円座	0	0%	図1の半円座	16	24%	<table border="1"> <tr><th>質問</th><th>回答</th><th>割合</th></tr> <tr><td>図1の半円座に、どの部分が好きですか?</td><td>回答数</td><td>割合</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>9</td><td>100%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>3</td><td>13%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>41</td><td>61%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>14</td><td>21%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>3</td><td>10%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>3</td><td>4%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>5</td><td>8%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>18</td><td>27%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>48</td><td>41%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>9</td><td>9%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>3</td><td>3%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>55</td><td>25%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>9</td><td>12%</td></tr> <tr><td>図1の半円座</td><td>1</td><td>2%</td></tr> </table>	質問	回答	割合	図1の半円座に、どの部分が好きですか?	回答数	割合	図1の半円座	9	100%	図1の半円座	3	13%	図1の半円座	41	61%	図1の半円座	14	21%	図1の半円座	3	10%	図1の半円座	3	4%	図1の半円座	5	8%	図1の半円座	18	27%	図1の半円座	48	41%	図1の半円座	9	9%	図1の半円座	3	3%	図1の半円座	55	25%	図1の半円座	9	12%	図1の半円座	1	2%
質問	回答	割合																																																																																															
図1の半円座に、どの部分が好きですか?	回答数	割合																																																																																															
図1の半円座	9	100%																																																																																															
図1の半円座	40	61%																																																																																															
図1の半円座	16	23%																																																																																															
図1の半円座	0	0%																																																																																															
図1の半円座	2	3%																																																																																															
図1の半円座	4	6%																																																																																															
図1の半円座	32	70%																																																																																															
図1の半円座	6	12%																																																																																															
図1の半円座	0	0%																																																																																															
図1の半円座	3	4%																																																																																															
図1の半円座	40	73%																																																																																															
図1の半円座	2	3%																																																																																															
図1の半円座	0	0%																																																																																															
図1の半円座	16	24%																																																																																															
質問	回答	割合																																																																																															
図1の半円座に、どの部分が好きですか?	回答数	割合																																																																																															
図1の半円座	9	100%																																																																																															
図1の半円座	3	13%																																																																																															
図1の半円座	41	61%																																																																																															
図1の半円座	14	21%																																																																																															
図1の半円座	3	10%																																																																																															
図1の半円座	3	4%																																																																																															
図1の半円座	5	8%																																																																																															
図1の半円座	18	27%																																																																																															
図1の半円座	48	41%																																																																																															
図1の半円座	9	9%																																																																																															
図1の半円座	3	3%																																																																																															
図1の半円座	55	25%																																																																																															
図1の半円座	9	12%																																																																																															
図1の半円座	1	2%																																																																																															

4. 成果と課題

共通科目の多くは、週に一度、学部、学科、学年等が異なる学生が一つの教室で講義を受講している。従って、隣に座っている学生と話をしたりすることも少なく、回りの人たちがどのようなことを考えているのかといったことはほとんどわからないというのが現状である。学生の講義への主体的な参加を実現していくためには、教師と学生、学生間のコミュニケーションを少しでも高め、相互に意見を交流していくことが重要である。その実現のための一つの手だてとして、I-supportシステムの活用のあり方を検討していきたい。

また、将来的には、受講生が独自に絵画の画法を考察した内容を添付ファイルで教員側に送信すれば、それらをオンライン上で公開したり、講義内容に取り入れていくといった「コラボレーション型」講義への発展を考えている。

〈文責：黒田 恭史〉

「基礎学力調査」の結果

1. 調査の概要

教授法開発室では本学学生の総合的な基礎学力を把握することを目的として、平成12年度の新入生より基礎学力調査を実施している。今回はその4回目にあたる。試験問題には全国規模の就職対策試験を使用した(平成14年度より継続して使用)。調査は新入生と新3回生を対象にして実施し、両者の違いをみた。また、新入生の属性を入試種別に分けることによって、平成15年度新入生の基礎学力の特徴をみた。

なお、学生に対しては個人別のデータが送付され、ひとりひとりが全国レベルで自分の学力の相対的位置を確認することができる。また、学生は卒業後の志望分野に応じて学習上のアドバイスを得ることができるようになっている。

2. 調査の時期および対象者数

(1) 1回生

- ①調査時期 平成15年4月7日
(新入生オリエンテーション時)
- ②対象者数 1,436人
(編入生・留学生・その他、計25名含む、
1回生1,537人 回答率93.4%)

(2) 3回生

- ①調査時期 平成15年4月9日
(在学生オリエンテーション時)
- ②対象者数 914人(3回生1,524人 回答率60.0%)

3. 調査問題の内容

今回の調査は前年度と同様の一般常識試験対策テスト(A社)を用いた。制限時間は40分で、設問は120の小問から構成されている。設問の内容は前年度までと同じく「基礎常識」と「社会常識」とに分けることができる。基礎常識は高校の5教科に対応する「国語」「数理」「英語」「社会」の4科目、社会常識は社会人として心得ておくべき「日常生活」と「時事問題」との2科目から成る。

基礎学力調査の科目構成

基礎常識：高校までに学習してきた科目に対応

「国語」、「数理」、「英語」、「社会」

社会常識：社会人としての知識と教養

「日常生活」…マナー・敬語、暦や習慣・生活習慣、文の照合・図形の並べ替え

「時事問題」…政治・経済、文化・科学、社会・芸能・スポーツ

4. 本学学生の全国における位置

調査に用いたテストは通年に亘って全国の大学で実施されており、その実施時期によって問題が多少異なっている(とくに「時事問題」の設問が異なる)。そのため、全国と本学を素点で比較することが難しい。そこで、便宜上、T得点(標準得点が50.0の偏差値に準ずる標準化得点)を用いて本学学生の特徴をみることにする。ここでT得点を用いる利点は、全国(受験者：今年度9,697人、前年度38,709人)の中での本学学生の相対的位置が把握しやすい点である。また、前年度と今年度のT得点の算出基準がほとんど同一であるため、平成14年度調査と平成15年度調査の結果を比較することも可能である。

表1でみると、平成15年度、平成14年度とも、本学学生は全国レベルの平均に達していない。本学学生は、テストの実施年度や回生にかかわらず、基礎常識の「英語」と「社会」のT得点の平均値が低い。同様に、社会常識のT得点の平均値もかなり低く、とくに「時事問題」は40前後と低い。

3回生は就職対策用に希望者が調査を受けていると考えられる。それにもかかわらず、就職試験に必要な社会常識が全国レベルよりかなり低く、1回生とほぼ同じ得点である。また、「英語」は平成14年度、平成15年度とも3回生の方が1回生より得点が低くなっている。「英語」の設問内容は、時事英語の読解能力と英会話に必要なとされる能力を問うているが、本学学生は実用英語に不得手のようである。

平成14年度と平成15年度を比較してみると、全般的にほとんど差がみられなかった。ただし、各科目とも、わずかながら平成15年度の方が平成14年度よりもT得点の平均値が上昇している(全国の受験者のレベルが相対的に低くなった可能性もあるが、ここではT得点による標準化を信頼することにする)。1回生で比較すると、平成15年度の新入生(現1回生)が平成14年度の新入生(現2回生)より、「時事問題」(1.5=38.6-37.1)と「英語」(0.9=45.4-44.5)で平均値の上昇が大きかった。しかし、依然として全国のレベルに達しておらず、語学力を含めた広い意味での教養が本学に入学してくる学生に不足しているといえよう。

なお、平成12年度、平成13年度の基礎学力調査(B社のテスト使用)でも今回とほぼ同様の結果が得られている。すなわち、本学学生は「英語」と社会常識が入学時点で弱い傾向にあった。また、過去4年間の傾向をみると、学生は本学に入学した後に、社会常識をほんのわずかしが身につけておらず、英語の力は徐々に弱まっていることがうかがえる。

「基礎学力調査」の結果

表1 T得点の平均値(年度別および回生別)

	全科目 総合	基礎常識				社会常識	
		国語	数理	英語	社会	日常生活	時事問題
平成15年度							
1回生(1436人)	41.9	48.2	48.1	45.4	45.3	41.9	38.6
3回生(914人)	41.7	47.8	47.6	43.9	44.5	42.6	40.6
平成14年度							
1回生(1496人)	40.7	47.7	47.6	44.5	45.0	41.2	37.1
3回生(990人)	40.5	48.0	46.1	42.7	44.4	42.2	38.8

5. 入試種別の比較

表2で、平成15年度の1回生を入試種別のグループに分けてみると、入学試験(A日程、B日程、センター入試)を受験した試験組と推薦入試(公募制推薦、指定校推薦、その他推薦)を受けた推薦組とで基礎学力に大きな差がみられる。

全科目総合のT得点では、平均値が高い方から、センター入試(48.2)、B日程(46.1)、A日程(44.1)の順であり、試験組全体で44.7の平均値を示している。これに対して、推薦組はどれもT得点が低く、平均値が38.5である。

基礎常識もすべて推薦組が入試組よりT得点の平均値が低い。差が大きい方から「英語」($-6.0=42.2-48.2$)、「数理」($-5.4=45.2-50.6$)、「国語」($-5.1=45.6-50.5$)、の順であり、推薦組は試験組より5ポイント以上も平均値が低くなっている。とくに推薦組の「英語」の平均値は42.2と低く、全国レベルで見ると英語力がかなり不足している。

社会常識の科目は試験組も推薦組と同様に平均値が低くなる。とくに「時事問題」は試験組も平均値が40以下である。センター入試の学生は全般的に高い平均値を示しているが、それでも「時事問題」のみは平均値が39.0と低くなっている。

さらに詳しく入試種別でT得点の平均値の違いをみると、「センター入試」の学生と「その他推薦」の学生とで大きな違いがみられた。差が大きい方から、「国語」($11.7=54.6-42.9$)、「英語」($11.3=53.0-43.8$)、「数理」($9.2=53.0-43.8$)、「日常生活」($7.2=45.7-38.5$)、「社会」($6.5=49.4-42.9$)の順である。「時事問題」には大きな差がみられなかった。

参考として、表には記載しなかったが、学科別に1回生のT得点の平均値の違いをみた。平均値が最高の学科と最低の学科を比べてみると、差が大きい方から「数学」($12.0=53.4-41.4$)、「英語」($9.0=50.0-41.0$)、「国語」($8.7=52.6-43.9$)の順であり、臨床心理学科がこの3科目でいずれも最高の平均値を示

した。また、生涯学習学科の「数理」(51.2)と教育学科の「数理」(51.0)も平均値が高く、これは教育学部(臨床心理学科と教育学科)で入試科目に数学が必須になっていることと関連していると考えられる。他に、史学科も「国語」(52.5)の平均値が高くなっている。

学科別に3回生の特徴をみても、1回生と同様の傾向がみられた。すなわち、「数学」は臨床心理学科(51.8)と教育学科(50.7)でT得点の平均値が高かった。また、「英語」は臨床心理学科(51.9)、「国語」は史学科(53.3)と臨床心理学科(52.4)でT得点の平均値が高くなっていた。

表2 1回生のT得点の平均値(入試種別)

	全科目 総合	基礎常識				社会常識	
		国語	数理	英語	社会	日常生活	時事問題
A日程(558人)	44.1	49.8	50.2	47.5	46.7	42.7	39.7
B日程(157人)	46.1	52.0	51.3	49.8	47.2	44.1	40.0
センター入試(38人)	48.2	54.6	53.0	51.2	49.4	45.7	39.0
試験組(753人)	44.7	50.5	50.6	48.2	46.9	43.2	39.7
公募制(354人)	38.6	45.9	44.7	42.2	43.2	40.9	37.8
指定校(208人)	39.4	46.3	46.7	43.0	44.3	40.4	37.1
その他※(85人)	36.1	42.9	43.8	39.9	42.9	38.5	36.6
推薦組(647人)	38.5	45.6	45.2	42.2	43.5	40.4	37.4

※その他には、宗門、特別推薦(同窓、課外活動、スポーツ強化)が含まれる。

6. 課題

集計結果から、入試種別および学科別にみて学生の基礎学力に大きな違いがあることが確認できた。従来型の講義は学生の学力が同じ程度であることを前提に行われてきたが、学生の基礎学力が同一でないことを踏まえて、教員から学生への一方的な講義を見直す時期が来ているといえよう。

基礎学力調査は来年度から同一学生の経年比較(1回生時と3回生時の比較)を可能にするデータがそろそろ予定である。さらに、基礎学力調査を入試データや各種試験のデータ、また授業評価アンケート等とリンクさせることによって、入試システムの改善やカリキュラムの改善等に役立つ基礎資料を作成することが可能になる。

本学における各種取組やそれらのデータを有機的に活用することによって、最終的には学生各人が自身の学習計画を効果的に組み立てることができるように、全学的な支援体制を構築することが必要であろう。

〈文責：近藤 敏夫、集計：藤田 智之〉

教授法開発室だより

関係図書紹介

『大学はどこへ行く』

石弘光著 講談社現代新書

『勝ち組』大学ランキング』

中井浩一著 中公新書ラクレ

『大学生論』 溝上慎一編 ナカニシヤ出版

「駅前大学」という言葉は、随分と昔に流行った言葉であるが、いまや駅前大学ならぬ、「駅前大学院」なる言葉が流行っている。或はまた「社会人入学」、「国立大学法人化」、「大学飛び級制度」、「4年で二つの学位取得可能」、「大検見直し」等々、大学に関する用語は日々更新されて、次々と新しい用語が横行するのが昨今の事情である。それは取りも直さず、大学を根本的に改革しなければ、日本の将来は危いという、一種の高まる危機感が、すっかり我々の心深くに根付いている状況にあるためと考えられる。

行政のこと、企業のこと、ましてや教育のこと等において、なによりも日本が優秀であり、世界の大手となり、各国からの見学者が絶えなかった時代は、つい最近のことであったようにも思えるが、意識の中では、ずいぶんと昔のことに思えたりするようになった。その時代は、既に終わった。過去は過去として、新たな意識で、日本の改革を推進して行かなければならないということは、誰もが思っている。しかし、日本をどう建て直して行くのか。具体的な方向が見出せない状況下で、足踏みが続いている、といった感じがある。

今回紹介する『大学はどこへ行く』という本には、日本再生の礎ともなる大学の改革については、三つの部分から構成されているが、著者が強調したかったのは、次の三点にまとめられる。すなわち第一点は、大学運営には、競争原理の導入が不可欠であること。第二点は、研究至上主義を排し、より教育重点に転ずる必要があること。第三点は、学生の教育は国際的な視点を目指さなければならないこと、である。この著者は国立大学の学長として大学を建て直し、新たな国の政治経済の礎とするべく格闘している、そ

の現場感覚からの発言だけに手ごたえが感じられる。

これまでの日本の大学は著者の言葉によれば、「大学のレジャーランド化」が大学イメージを支配していた。したがって学生も保護者も、これまでは大学の教育の内容を問題とする状況にはなかったのである。しかし日本の景気の長期的低迷によって、学生の売り手市場はとうに終りを告げて、これからは、「大学で何を、いかに学んだか」が、重要な企業への売込み要件となってきているという。その結果、いかに優秀な卒業生を世に送り出したかが、今、大学に問われている状況にある。したがって、大学をいかに改革して行くのかは、自ずと明かな状況にはある。しかし、もう一方で、そのように優れた学生を養成するための良質な教育サービスを、いかに提供しうかも大学に求められているわけである。本書では、その方策の一つとして、アメリカの大学教員のように、職能を分割させることも考えられると指摘している。すなわち日本の大学教員は、研究・教育・学内行政の三つを、教員の能力に関係なく負担させ、結果的に教育に手を抜く弊害があるため、研究に打ちこみ大学の学問水準を高める教授、研究より教育に生きがいを求め立派な教育者として大学の教育レベルを充実させる教授、そして大学の行政面で才能を発揮し行政職で処遇を受ける教授、の三通りの種別化である。

そうした生々しい大学の競争を具体的に記述しているのが、『勝ち組』大学ランキング』という本である。国立大学法人化による大学再編成にいたる状況が、実に詳しく書かれている。

止め!その前に肝心の学生は、一体何を考え、何を求めているのか。まず学生をしっかりと把握しないことには何事も始まらないのではないか。三番目に紹介する『大学生論』を読んで、もう一度改めて足許を見つめて、歩みだそうではないか。

〈文責:奥野 哲也〉

活動記録

- 4月7日 基礎学力調査新入生実施
- 4月9日 基礎学力調査3年生実施
- 4月22日 第1回教授法開発室会議
- 5月27日 第2回教授法開発室会議
- 6月4日 第3回教授法開発室会議
- 6月20・21日 平成15年度私情協教育の情報化フォーラム参加
- 6月23日～7月12日 春学期授業アンケート実施
- 7月5日 私情協第11回全国大学情報教育方法研究発表会参加
- 7月13日～15日 19th Annual Conference on Distance Teaching & Learning 参加 開催地マジソン
- 9月9日～11日 私情協大学情報化全国大会参加
- 9月16日 第4回教授法開発室会議
- 11月25日 教授法開発室だより10号発行

スタッフ紹介

- | | | |
|--------|--------------|-------------------|
| 教授法開発室 | 室長 | 原 清治 (生涯学習学科) |
| | 室員 | 笹田 教彰 (仏教学科) |
| | | 〳 八木 透 (史学科) |
| | | 〳 有田 和臣 (日本語日文学科) |
| | | 〳 松本 真治 (英語英米文学科) |
| | | 〳 西之園晴夫 (教育学科) |
| | | 〳 黒田 恭史 (教育学科) |
| | | 〳 奥野 哲也 (臨床心理学科) |
| | | 〳 近藤 敏夫 (社会科学) |
| | | 〳 岡崎 祐司 (健康福祉学科) |
| 事務局 | 教学部長 | 内藤 三義 |
| | 教授法開発室課長 | 久保 明 |
| | 教務課長 | 水谷 俊之 |
| | 通信教育部学務課長 | 石田 忠司 |
| | 教授法開発室主任 | 下野 隆喜 |
| | 教授法開発室専門職員 | 藤田 智之 |
| | 情報システムセンター課員 | 竹岡 修 |